

さ き ま 佐喜眞美術館



授賞団体紹介

○代表者：館長 佐喜眞 道夫 氏

○活動歴：

- ・昭和 50(1975)年 佐喜眞 道夫 氏、「絵のコレクション」を開始
上野 誠、ケーテ・コルヴィッツ、ジョルジュ・ルオー等
- ・昭和 58(1983)年 丸木位里・丸木俊夫妻が「沖縄戦の図」に取り組んでいることを知って心の底から喜びを感じる。
- ・平成 6(1994)年 11月23日 佐喜眞美術館を開館
- ・平成 23(2011)年 第33回琉球新報活動賞を受賞
- ・平成 26(2014)年 岩波ブックレット『アートで平和をつくる沖縄・佐喜眞美術館の軌跡』を出版
- ・～現在 常設展示：「沖縄戦の図」丸木位里・丸木俊作
年度ごとに、展覧会を開催

授賞理由

佐喜眞氏が、米軍基地となっていた祖先の土地に、美術館を開館しました。代表作でもある丸木位里・俊夫妻の「沖縄戦の図」等の作品と館長のガイドにより、美術館を訪れる多くの若者たちに平和の尊さを伝えています。

戦争体験者が減少する中、現地の言葉と圧倒される作品で、戦争についての記憶を後世に伝えています。平和教育を推進していくことを期待できるものとして高く評価します。

授賞団体のことば

活動のきっかけ

1972年、私は、沖縄の日本復帰以来急激に値が上がった軍用地使用料を、「島ぐるみ闘争」への分断策だと考えました。基地内に土地を持っていた私は、これを反転させようと、お金が生かされる方法を考え、長崎の原爆を描いた作品や貧しい人びとの生活や労働を描いた作品など、絵のコレクションをはじめました。上野誠、ケーテ・コルヴィッツ、ジョルジュ・ルオーなどを収集しはじめて10年がたった頃、「沖縄戦の図」を描いた丸木位里・丸木俊両夫妻との出会いがありました。

丸木夫妻は「沖縄戦の図」は沖縄に置きたい、と考えていました。私は過酷な状況にあり続ける沖縄の地に「もの想う場」をつくりたいと考えていました。丸木夫妻と私の思いが重なり10年の歳月を経て、1994年11月23日に佐喜真美術館を開館しました。

目的やこれまでの取り組み

沖縄戦後の沖縄には、日米安全保障条約によって在日米軍基地が集中しています。^{ほんろう}翻弄される沖縄の地に、私は人々の内面を整える「もの想う場」が必要だと考えて美術館をつくりました。芸術の力はそれを実現できるのではないかと思ったのです。

たとえば、「沖縄戦の図」には沖縄戦の実相を徹底して描き込んでいますが、全体を丁寧に見ていくと、様々な出来事がモンタージュの形式で描かれ、個々の出来事として見えるのです。丁寧な線で描かれた人々からは画家の深い人間への想いが伝わってきます。残虐な戦争を描きながら「人間のいのちの尊厳」を感じ受け取る。この大逆転は、すぐれた芸術の力によってのみ可能なのではないかと思っています。



美術館外観 (© Futoshi Hanashiro)



丸木俊絵本原画展に来た地元の幼稚園児

大切にしていることや将来の展望

佐喜眞美術館へは全国から多くの小中高校生や大学生が来館します。日本の未来を担う若い人たちへメッセージを送る仕事ですから、コレクションする作品も「本物」、説明も「本物」でなければならないと考えています。

授賞の感想や授賞団体にとっての賞の意味

その昔、沖縄は東アジアとの交易のなかで豊かな文化国家・琉球王国を築き上げておりました。その時代、日本への窓口は自由都市堺港でした。三線をはじめとして琉球からの豊かな文化は鹿児島ではなく、信頼関係の深い堺港から日本へ伝わっていきました。堺は、千利休をも輩出する豊かな芸術文化に富み自立した都市でした。

文化の型は、その後も長い間歴史に影響するものだと考えています。今回、受賞のお知らせを受け、私は、なにか尊敬しあっていた遠い親戚が探し出してくれたように懐かしく嬉しい気持ちになりました。そしていま、堺市が平和、人権問題に深く取り組んでおられることを知って深く納得いたしました。

堺市からの平和貢献賞の受賞は、佐喜眞美術館に大きな拡がりと力を与えてくれました。本当にありがとうございました。

堺市の思い

戦後 73 年が過ぎ、日本国内では戦争についてじっくり考える機会が減っていると云わざるを得ません。その中で、心を落ち着けて静かに平和について考えることができる場所であり、平和の尊さを後世に伝えている同美術館の存在は、非常に意義深いと考えています。

